

---

# 全力少女と災難体质

アルト

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

全力少女と災難体质

### 【NZコード】

N2331BA

### 【作者名】

アルト

### 【あらすじ】

「あなたの願いはなんですか？」

高校三年生の主人公朝宮悠希は夢に破れ傷ついた心を癒すために懐かしい故郷である御影町へと帰ってきた。しかし、とある一人の少女との出会いが災難に巻き込まれる原因となる。

少女の名前は咲山梨花。悠希が通うことになる御影高校ではその名を知らないものはいないとまで言われる天才にして天災、ついたあだ名が全力少女というまるで台風のような少女だった。

ひょんなことから悠希は梨花に付回されることになるのだが、次第にその距離を縮めていくことによつて彼女の秘密を知ることになる。

そして、彼女の秘密を知つた悠希はとある決断をする……

願いの叶う町、御影町を舞台に高校三年生の主人公が高校生活という小さな世界の中で苦悩し時には友人達と衝突しながらも必死に生きようとする再生ラブストーリー。

## プロローグ

「あなたの願いはなんですか？」

願い、それは人が思うこうあって欲しいと思う事柄、変化、または願望。

人の願いなど、人の数だけあり、またその内容も千差万別だ。お金持ちになりたい、人より優れた人物になりたい、といったわかりやすい欲望ともとれるものや、昔別れた両親に会いたい、あの人との恋を実らせたい、などの叶いにくい願いなど様々だ。

ただ、この世界はそんな全ての願いが叶うようには出来ていない。叶う人は叶うし、叶わないものはいくら願つても叶わない。そんな理不尽な世界。

しかし、願いの叶つた人全てが幸せかというとそうでもなかつたりする。本当に理不尽な世界だ。

願いを叶えるためには、対価が必要になつてくる。もちろん、その願いが大きければ大きいほど必要な対価もそれに見合つた大きなものになる。

だが、対価を払つても叶わない願いもある。星の数ほどもあるのだ。それでも、人は願うことをやめようとは決してしない。願うことは人にとっては、生きるための希望でもあるのだ。

この世界は、とてもとても理不尽な世界、それでも人は願うことを見つめない。

…………願いの先にあるものを信じて。

プロローグ

「あなたの願いはなんですか？」

落ちゆく世界の中で彼が聞いたのはその声だつた。

妙な浮遊感と急激な重力、それらを一身に感じながら彼は屋上から飛び降りた。いや、飛び降りたというのは正しい表現ではない。その証拠に、少年の胸元にはすでに氣を失っている少女の姿があった。彼は屋上から落ちた少女を助けるために共に屋上から飛び降りたのだ。

そんな中で聞こえた声、しかし、その声はすでに氣を失っている少女のものではない。

けれど、直接頭に響いてくる声、

なんだこんなときに?...と思いつつも声は再び頭の中に響いてくる。

「あなたの願いはなんですか?」

長い間空中に漂っているせいで、方向感覚までもがわからなくなつてくる。現実かそれとも幻かわからないがその姿は確かにそこにあつた。

「朝宮悠希、あなたの願いはなんですか?」

上下逆転した姿でその者は問つ。同じようにならへて落ちてゐる。いや、そこだけ時間や空間といったものを切り取つたかのようにそれはそこにはいる。それもその場に静止した状態のまま、

そのナニカが現れた瞬間、彼らの体は急激に浮遊感や重力を失い、その場にとどまるうとする。巨大な水あめの中に一人揃つて放り込まれたら身動きが出来ない、そんな感覚。

落ちていくことも這い上がることも出来ない。ただ唯一、許されるのはその場にとどまることだけ。それでも、体が自由に動かせるわけではなく、せいぜい、体の体勢を整えることぐらいしか出来なかつた。

彼らをわずかの間だけ生きることを許したその人間かも理解し難いナニカは若い女性の姿をしていた。その姿はどこかで見たような姿をしていたが、生憎と悠希にはそんな特定の女性というものはいない。しかし、妙に懐かしい、そんな気持ちにさせる不思議な魅力

があった。

自身が落下していることを忘れそうになる。切り取られた世界の中でも胸の中で氣を失っている少女は相変わらずの様子で目を閉じたまま開くことはない。

「あなたの願いはなんですか？」

なおもしつこく問う女性は、言葉とは反面に何故か悲しそうな表情を浮かべている。そんな彼女の言葉に悠希は考える素振りを見せるが、残念ながらこの状況でそんな余裕はない。

「僕の……、願い？」

「そう、あなたの願い？」

呆けた様子で問い返す悠希に、目の前の彼女は悲しい顔を浮かべながらも彼に問う。

「思い出して、あなたがここにいる意味を」

「ここにいる意味？ どういうことだ？」

彼女は悠希の問いに答えず、ただ彼と胸の中で眠る少女だけを見据えていた。そんな彼女に悠希は何も言えずにいた。ここにいる意味？ そんなことを考えたことすらない。

ただ普通に生きて普通に死んでいく。僕の人生なんてそんなものだと思っていた。

そう、ただそれだけの話だつたはずだ。

彼はそれ以上何も求めない。しかし、彼女は悠希にここにいる意味を求める。

「僕は……、僕は……」

なぜここにいるのだろう、わからない。

そんな漠然とした思いが胸の中にこみ上げる。屋上から落ちて自身の人生などあとわずかという中でまさか自身の意味を問われるなど想像すらしなかった。何のために生きて何のために死んでいくのか、

この世に生まれて十七年、そんなに長くは生きてはいないが世の中のことは少しはわかるつもりではいる。それでも、この小さいは

ずの世界は彼にとっては大きすぎた。自分のことすら完全には理解してはいないのに、世界の全てをを知ろうとすることが間違いなのだ。

「う……、ん……」「

胸の中にいる少女がむずがるよう口元を上げる。

「……意味か……」「

少女を見ながらふと思つ。きっと僕のいる意味はこれなのだろ。もちろん、確証など無い。ただ、そう思つた。

彼女は悲しい顔から優しい微笑みに変わると自身の意味を悟つた悠希を褒めるように言つた。その鈴のような響きを持つ声は悠希の心中にじっくりと染み込んでいく。ぱう、と悠希の中に温かい思いが溢れる。

「僕の意味」

「そう、それがあなたの意味、そして、あなたの願い」

「僕の願い」

自身の意味を悟つた時、再び世界が動き出す。ゆっくりと確実に世界は動き出し、彼らは落ちてゆく。

胸に抱えた少女は相変わらず目を開けることはない。けれど、それはどこか安らかな眠りのようにさえ見える。

薄れゆく意識の中でなぜそう思つたのかは彼自身見当もつかない。少なくとも彼が助かりたいとか自身の身の安全を保障するものではなかつた。

たつた一言、

落ちてゆく世界の中で彼は答えた。

その声は誰かに届いたのかはわからない。少なくとも……、  
彼女には届いたはずだ。

これでいいんだ……、これが僕のいる意味でこれが僕の願いだ。  
そんなことを思いながら、悠希の意識は遠退いていった。

## ほんの少しだけ至んだ日々の始まり

「「ひ……ん……」

夢を見ていた。正直、どんな夢だつたかはあまり覚えていない。良い夢か悪い夢かと問われるならば間違いなく後者ではあるのだけれど、ただ、その夢の内容を深く吟味したならば意外にも良い夢なのかもしれない。

「まあ、どっちでもいいけどね」

そんなどうでもいい感想と、まだふわふわと浮いてるような感覚に、頭を軽く振り目を覚まさうと意識を集中させる。蕩けそうになる眠気が恋しいが、いつまでも公共の場で寝顔をさらし続けるのもどうかと思い起きたことにした。

「ふう……今はどの辺りだろ?……」

体を動かすついでに、辺りを確認するように車内を見渡すが、残念ながらこの車内には僕一人しかいない。さすがにこんなところまで旅行に来る物好きはいないか。そんなことを思いながら大きく伸びをする。

「うーん、と、伸びをしたときに思わず声が漏れるが、辺りを気にすることもなく思つ存分に体を伸ばす。変な体勢で寝ていたせいか節々が痛い。

長いこと電車に揺られ続けたせいで、いい加減座り心地も悪かつた。さすがに三時間も一人で話し相手もなく、座り続けているのもなかなか苦痛だった。そんなことを思いながら風に紛れて何処からか懐かしい潮風の匂いがする事に気づく。

「そういえば、海が近いんだっけ」

しみじみと懐かしい故郷の姿を思い出す。窓の外には青々とした海が広がっていて、小さく見える船が一つの点の様に海をのんびり走っていた。その風景は自分がいた故郷がもつすぐそこにあることを感じさせる。そんな風景を眺めていると、座り心地の悪いイスの

「ことなどはすっかり忘れてしまった。

「みんな元気にしてるかな」

一年間、連絡も取っていない友人の姿を思い浮かべる。シロは元気だらうか、カズはきっと美人になっているだらうな。きっと詩音も大きくなっているよな。そういうえば今年から高校生か。などと、ほんやりと考えながら外を眺める。

「あなたの願いは何ですか？」

頭の中で響く声にふと我にかえる。この町を出るときに聞いたあの声が再び聞こえた。

ガタン、ガタンと、聞こえる単調な電車の音。今、この車両には僕しか乗っていない。だから、僕に話しかけてくる人物も残念ながらいない。しかし、それでも聞こえる声。誰かが僕に問いかけるようなそんな声。その声は鈴のよつた響きを持ちながらもどこか寂しそうな音色を持つ声。

「僕の願い……」

願い。それは何なのだろう。この町を出るときははつきりとした目的は持っていた。でも、今はどうだらうか？ そんな漠然とした事を考えていると、駅員の単調なアナウンスが目的の場所を知らせた。

「次は御影町、御影町」

ようやく着いた故郷が見えてくると、先程の疑問はいつの間にか霧のよう霧散していた。

電車が完全に停車するのを待つて、誰もいないホームに降りる。当然ながら、この駅に降りる人間は僕しかいなかつた。

電車のドアが閉まる音と、閉まるその様が僕の夢へと続く扉に見え、それが完全に閉じてしまつたのを物語つているように見えた。もう、終わつたんだ。これで、僕の夢は完全に潰えた。後ろを振り返らないつて決めたはずなのに、未だに引きずつている。そんな気持ちが嫌でこの場所に帰つてきたはずなのに……。

「もう……終わったことだ」

まるで自分に言い聞かせるように呟く。やつする」とで新しい自分と出会える気がしたから。

今まで、自分を運んでくれていた電車を見送り、誰もいない改札口へと目指す。向こうにいたときは自動改札が普通だったから、こんな誰もいない改札口というか無人の駅が無性に新鮮に見えた。

少し古びたポスターと時代とともに風化した駅。潮風の匂いと気持ちばかりの春の陽気が僕を迎えてくれた。

久しぶりに帰ってきた故郷の空気を思い切り肺に吸い込む。春の香りが体中に染み渡り、振り返ると青い海と少し冷たい風が心地よかつた。

「変わらないなあ」

故郷に帰ってきたの第一声がこれだ。もう少ししまともな感想があるだろうと、自分自身に苦笑する。でも、本当に感動した時などは声など出ないものだ。

海沿いの駅から見える町並みは僕が去ったあとあまり変わっていないようだった。まだ咲くには少しばかり早い桜と、その合間に沿つて造られた家屋、そしてその場所に息づく人々。町は坂の傾斜に沿つて造られていて、春にこの街の展望台からこの町を見渡すと桜の絨毯と青々とした海が一望できる。御影町それがこの町の名前だ。

新しい学校の転入手続きの事もあったから、まだ春休みのこの時期に帰ってきた。反対する親を説得し、最後の一年くらいはやはり心許せる友人たちと過ごしたい、そんな思いを胸に抱きながら今ここにいる。

だが、目的はそれだけではない。僕にはもう一つ叶えたい願いがあつた。ただ、それは、どんなに願つても叶わないかもしれない願いだ。それでも僕は、一縷の望みを持ってこの町に帰ってきた。

「少し、考えすぎかな。僕のこの町での生活はまだ始まつてすらないんだし」

自身で思つた下らない不安を一蹴すると、目の前に見える町並み

に染まるように歩き出した。

昔と変わらないはずの町は少しづつ変化を見せていくようだつた。当然だ。僕も成長すれば町も変わつていく。それが当たり前の事のはずなのにひどく寂しく思えた。しかし、その中にあつても変わらないものがあることに気づく。小さい頃によく遊んだ公園や、小銭を握り締めて通つた古びた駄菓子屋、懐かしき母校、細い路地裏、そのすべてが僕がここにいた証に見え、自分の存在を証明しているかのように思える。

感傷に浸りたい思いに駆られたが、僕はそこまで人生を達観するほど長生きはしていない。まだまだ知らない事の方が多いし、これから変わつたり、作られたり、失くなつていく物の方が圧倒的に多い。だから、まだ感傷には浸つてなんかいられないのだ。

小さな頃歩いた桜並木を見上げながら、自分の足跡を辿る。今はここにいる。だから、今はそれだけでいい。

ふと、立ち止まつたそばから、海から吹く風に煽られ木々がなびく。まるで、僕の思いに反応しているような気分だ。

ゆつくりと目を閉じる。昔、描いた思いが僕の中に去来する。

あの子のはにかんだ笑顔、少し怒つたときに見せる頬を膨らませた子供っぽい表情、時々遠くを見つめてため息を漏らす寂しそうな表情、不意に見せる大人っぽい表情、そのどれも忘れたことは一度だつてない。

あの子の顔を思い出して、懐かしい記憶に触れ自然と笑みがこぼれる。

「……僕は君に伝えるために戻つてきたんだ」

そんなことを口にした直後だつた。

ビキンッと、体に電流を流されたような痛みが走る。

「な、なんで！？」

気のせいだ。本当はそう思いたかつたが、体は正直なようで心臓がドクン、ドクン、と激しく脈打つのがわかる。閉じていた目を開け周りを確認するが、残念ながら何もない。

やはり、気のせいいか？ そう思い首を傾げながら歩く。いつするが、その場から歩くことが出来ない。

「何があるのか？」

自分に言い聞かせるように呟く。当然ながら、その問いに答えてくれる者などいない。

体中の感覚が鋭敏になつていて、体がこの反応を示すときは大抵、ろくなことには遭わない。最初はこの反応に戸惑いもしたが、さすがに慣れた。むしろ、この体のおかげでここにいることが出来ていると言つても過言ではない。

なんだ、一体何が起きる？

そんな不安とある種の期待の入り混じつた感想を抱きつつ、その事態を静観する。

ふいに視線を感じ慌ててその方へと向き直る。ふわりと、黒髪を風になびかせながら一人の少女がこちらを見ていた。

「君は……」

まさか、そんなはずは……。

動悸がさらに増していくのがわかる。体の体温がそれに呼応するよに高まつていく。

あの長く艶めく黒髪、二つの大きな双眸、雪のよつに白い肌、触れれば途端に壊れてしまいそうな華奢な体、そのいづれもが先ほど僕が思い描いていたあの子と同じ姿形をしてそこに立っていた。一刻も早く駆け出したい。君の顔をもつと見たい。向かい合つて君の声を聞きたい。

思い描いた夢と現実が重なつていく。

どれだけこの時を望んだか。

どれだけ君の事を考えていたか。

どれだけ……どれだけの思いを募らせて、叶わないと思っていた。

だけど、君はそこにいる。だから僕は君に会いに戻ってきた。

動け、動け、強く、強く、

そんな思いと共に、より強く動けと念じる。

一步踏み出す。やつとパドックから開放された競走馬のよつ」

田散に少女へと駆け寄る。

会えた、やつと会えた。一年間もずっとこの時を待ち望んでいた。予想以上に早い願いの成就に、少しの戸惑いを覚えつつも僕の心は最高に高まっていた。

しかし、対する少女の態度は僕の予想したものとは違い、とても冷ややかなものだった。

こちらに向かってくる変質者を見るような田で顔を歪めると、僕と同じ方向を向いて走り出した。

「ちよ、ちよっと待って……」

慌てて声をかけるが少女は一田散に逃げる。僕は逃げる少女にさらに加速度をつけて走る。側から見れば、完全に変質者が少女を追い掛け回している構図になっているものの、今の僕にそこまで考えている余裕などない。

一年間ずっと思つてきた願いが今、叶おうとしている。それだけで頭の中は一杯だった。

それにも逃げる少女の足の速いこと速いこと。男子高校生であるはずの僕が追いすがるのに必死になつていて。手を伸ばせば届く距離にあるのに、また……僕の思いは届かないのか……。

いや、届く！だから手を伸ばせ！ 握め！ 僕は君に伝えたいことがたくさんあるんだ。心の中でもう一人の自分が叫ぶ。けれども田の前を走る少女はそんな僕の心中とは正反対の反応で「あんた何なの！？ なんで私を追いかけてくるの！？」必死になつて逃げ惑つていた。

「僕は君に会いに来たんだ！ ずっとずつと会いたかった！！」

自分でも明らかに変質者のような口ぶりでなにやらとんでもないことを口走つている気もしないではないが、それ以上に彼女を求める思いが上回つていた。ずっと走り回つてているせいで、息が上がりてくる。呼吸に空気がかかれる音が混じりだす。現役でいたときはもう少し走り回つてもこの程度問題なかつたのだが、やはり時の流

れは恐ろしい。格段に体力が落ちているみたいだつた。

少女はなおもペースを落とすことなく走つていたが、それでも、やはり僕のほうに分があった。

必死の体で彼女に追いつくと、全力で振り続けていたその手を掴む。

「ちよつと待つてくれ！！ 僕は君に話が

「何すんのよ！ 離せ、この変つ態つ！」

見た目どおり華奢な感触が伝わつてくるが、この体のどこにそんな力があるのだろうか少女はそう言つて掴まれていないほつほつの腕で僕を掴み返すと、勢いもそのままに宙へと放り投げる。

突然の状況に頭が追いついていかない。

グラリ、ふわり、ドスンッ！ アクシデント三段活用な感じできれいに地面へと叩きつけられる。

一体、何が起つた？ 状況を推測しようにも頭が回らない。地面に体を打ちつけた衝撃と痛みの方が強く、考えようとする強制的に排除する。

「か…………は…………」

漏れ出そうとする空気を押さえ込むとするが、衝撃に対するダメージのほうが大きくそれを許さない。体が不気味に痙攣するのがわかる。自分が投げ飛ばされたのだと気づくには時間がかかつた。それ程までに僕のダメージは深刻だつた。

「く…………があ…………な、なんで…………」

「な、なんなのよ…………あんた…………」

なんなのだとはこつちが言いたい。もしかして覚えていないのか

？ 僕の中にそんな不安がよぎる。踵を返すように少女は僕に背を向ける。その姿を見て僕は必死に引き止めようとするが、激しく体を打ちつけた衝撃のせいで言葉が出ない。

「ま、待つて…………くれ、僕は…………」

からうじて残つていた空気を総動員してかすれた声を吐き出す。

やつと…………やつと…………会えたのに。また叶わないのか？ 僕の願

いは……。

遠退く意識と戦いながら彼女をその場に留めようとするが、その声が届くはずもなく、少女はその場から立ち去り、僕は一人春の陽気の中、地面に這いつくばりながら意識を失った。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2331ba/>

---

全力少女と災難体质

2012年1月5日22時46分発行